

日本戦後文学における“戦後”は果たして終わったのか

Ahmed Mohamed FATHY MOSTAFA

Assistant Professor, Faculty of Arts, Cairo University

序論

1. “戦後”の意味
2. 日本の“戦後”とアメリカの“戦後”
3. エジプトの戦後と日本の戦後
4. “戦後文学”と“戦後の文学”
5. 日本戦後文学の問題点

結論

序論

太平洋戦争が終結して61年という長い年月が経っている。あの戦争が終わってかなりの時間が経ち、当時の人たちのほとんどがもうこの世にはいないだろう。しかし、“戦後”はどこで終わったのか、いや、「“戦後”は本当に終わったのか」という問いを抱きながら戦後文学を考えるとたいへん重要な課題に直面する。そこで「戦後文学」を論じることは甚だ難しいことになるのではないかとと思われるのである。今までの日本の幾つかの世代の小説家たちはこの戦争そのものと日本の“戦後”をどのように捉えてきたのか、について考えてみると私にとってこのテーマは広すぎて一つの論文にまとめられない。したがって、本稿では、「戦後はもう終わった」というふうに片付けてしまう日本戦後史の歴史評論家そして日本文学史の評論家はどのような意味で“戦後”という言葉を使っているのか、また、その意味において“戦後の終わり”の区切りをどこに置いているのか、という歴史的で、文学史的な視点から考察し、戦後文学における“戦後”は果たして終わったのか、それともまだ終わっていないのかという問題意識において解明したいのである。

1. “戦後”の意味

文字通りで言えば、“戦後”というのは、「戦争が終わった後」という意味になるとごく普通に思われる。日本の場合、おそらく1945年、昭和20年8月15日の正式な終戦宣言の時点から、日本の“戦後”は始まるのではないと思う。しかし、事実上沖縄では“戦後”はそれより2ヶ月も早く、具体的に言えば1945年6月23日の日本軍第32軍の壊滅ですでに始まっていたのである。

それでは、日本の国語辞典や百科辞典では“戦後”という言葉はどのように紹介されているのか。

まず、『広辞苑』では“戦後”は「戦争の終わったあと。特に第二次世界大戦の終わったあと」¹と簡略に定義している。また、『学研新世紀百科辞典別冊最新技術用語 360』では、「戦争の終わったあと。特に第二次世界大戦の終了後」²とされ、『広辞苑』と似たような定義を行っている。

次に、岩波書店の『日本史辞典』によれば、「一般には戦争終了後の勝利ないし敗北に伴う特殊な状況をさす。近代日本は日清・日露・シベリア出兵・満州事変・日中戦争・アジア太平洋戦争と戦争を繰返して戦前・戦後が画然としないが、現在ではアジア太平洋戦争後の1945年以降をさす。ただし56年経済白書が戦前生産力水準の回復をくもはや戦後ではない」と述べたように、時代を画する事象が現れるたびに「戦後は終わった」という議論がおこる。現在では戦後史と現代史がほぼ同義となり、1945年以前の過去と比較し回顧する意味を込めて戦後という場合が多い³と解釈されている。

また、インターネットで、フリー百科事典『Wikipedia』では、「戦後とは、戦争の終結後の短期または長期的な期間をさす。現在の日本では…第二次世界大戦（太平洋戦争）後の意味で用いられることが多い。戦争では多くの破壊や社会システムの大変革が行われるため、戦争が終結した後は、社会体制などが新しく作り直され、価値観まで変化する。このため、大きな戦争を一つの時代の区切りとして、戦前・戦後という呼び方をする。1956年の経済企画庁による『経済白書』で「もはや戦後ではない」という言葉が使われ、流行語になった。しかしながら現在においてはこの短期的な戦後の定義を念頭に置いた発言がされることはなく、1945年8月のポツダム宣言受諾を受けた玉音放送以降、現在に至るまでの昭和並びに平成の時期を総称して戦後という言い方が一般的である」⁴と定義している。

以上、日本の辞典における「戦後」は明らかに「日本の敗戦」を前提として定義されている。

2. 日本の“戦後”とアメリカの“戦後”

太平洋戦争の相手のアメリカ合衆国では、日本と違って、日常的に“戦前”“戦後”という言葉を使用していない。これは朝鮮戦争を始め、ベトナム戦争、湾岸戦争、イラク戦争など、アメリカが多くの大戦争に参加しており、“戦前”“戦後”ではそれがどの戦争を指す言葉か分からないからである。これがアメリカが日常的に“戦前・戦後”という言葉を使っていない一つの大きな理由ではある。しかし、もう一つの大切な理由が他にもある。それはアメリカがそれらの戦争を通してほとんど勝利をおさめているからである。ベトナム戦争では最終的にアメリカが軍事的に負けて余儀なく当時の南ベトナムから引き上げてしまったと言っても、アメリカ本土は爆撃一つ受けていない。太平洋戦争ではアメリカは戦勝国である一方、日本は敗戦国である。ここでの戦勝国の“戦後”と敗戦国の“戦後”とは、言葉が同じでもその中身が大分違うものである。ましてや、日本は戦争で負けただけではなく壊滅的な被害を蒙ってしまったわけである。

日本は軍人も民間人も含めて310万人ぐらいの人が亡くなった。また、日本の大都市は

空爆によってほとんどが焼け野原になったし、人類史上はじめての最大の大量殺戮兵器である核爆弾の計り知れない被害を受けてしまったのである。沖縄の激戦でも軍人や民間人を含めて約18万8千人もの広島や長崎に劣らぬほどの犠牲者を出した。当時の沖縄住民の3人に1人、すなわち島の人口の3分の1ぐらいが亡くなってしまったということになる。さらに、太平洋戦争の終結直後から日本はアメリカ軍に占領されてしまったのである。これは日本の“戦後”を考えるのにとっても大きな要素だと思われる。

これだけ指摘しても日本の“戦後”という言葉の重みにはなお欠ける大きな部分が残る。それは日本が有史以来はじめて外国勢力による占領を受けたことである。このケースは世界の他の国を見てもはなはだ珍しいものであると言える。それまでの日本はいわゆる“神の国”でカミカゼに守られていて、絶対他民族によって侵略されることはない、というふうに固く信じられていた神話が崩れてしまった衝撃はおそらく想像を絶するものだったのではないかと思う。

この戦争によって物理的に日本が破壊され大勢の国民が殺傷されるという、計り知れない打撃を受けて敗北した挙句、外国勢力により侵略され、占領されたが、文化的及び心理的あらかひとがみな悲劇はもっと深いところにあった。日本独特の伝統的な信仰をささえてきた現人神たる天皇自身のイメージが揺らいでしまったことである。ここでは天皇制についての議論を繰り広げるつもりはないが、例の天皇人間宣言によってある意味では日本国民は自分の文化的なアイデンティティーに大きなひび割れが生じてしまった状態になった。これは1946年1月1日に正式に発表された詔書であった。そのなかで昭和天皇は「みづから現人神であることを否定していた。その内容は、それまで天皇を神としてあがめ、天皇のために戦争をし、天皇のために死ぬことが責務だと信じさせられていた国民に大きな衝撃を与えた」⁵。そのときはすでに多くの日本国民、特に知識人層は天皇が現人神であるということを感じなくなってきたものの、天皇が日本の文化伝統の象徴であっただけに日本人としてのプライドが傷ついたことが想像されよう。

イラク戦争当時、現役の国家元首サダム・フセイン大統領はアメリカ軍に数ヶ月の間追われる身となったあげく逮捕され、裁判にかけられ死刑判決を受けた。しかし日本の場合、アメリカは天皇の戦争責任を不問にした上、天皇を“人間”として“再生”させたわけである。対極東戦略上、日本国家の存続が必要であり、そしてその要として天皇制の維持が不可欠であった、との見解を早くからもっていた総司令部側が、天皇の戦争責任問題は国内の政情不安を促進すると政治判断したところに、象徴天皇の原理が形成され、日本の政権担当者がこれを一応納得した⁶。一方サダム・フセインが刑死することによって、彼を支持していた一部のイラク人またはアラブの大衆は何時か彼のことを忘れるであろう、というのがアメリカのヨミであるかもしれない。しかし骨抜きにされてしまった昭和天皇が、そのまま生き残らされた様を目の当たりするかぎり、おそらく日本国民は常に敗戦の記憶を呼び戻すことを余儀なくされるであろう。

近代史において、敗戦によりこんなに重なり合った深刻な災いを蒙った国は珍しいのではないかと思われる。数十年にわたって中国や朝鮮半島をはじめ東南アジアや南太平洋で

加害者であり続けた日本は、あつという間に被害者の立場に入れ替ったわけである。日本国民にとってはまったく思いがけない状況の中で、日本の“戦後”がはじまるのである。すなわち日本にとって、これはたんに“戦争が終わった後”の“戦後”だけではなく、むしろこれは“敗戦の後”の“戦後”であり、“被占領国の時代のはじまり”の“戦後”であり、事実上の骨抜きの主権国家の“戦後”であり、アイデンティティーが曖昧な状態の“戦後”であり、まったく先の見えない“戦後”であった。

1956年の経済企画庁による『経済白書』で「もはや戦後ではない」という言葉が日本ではじめて使われ流行になった。白書は景気回復と物価の安定・金融緩和を「数量景気」と名づけ、これにより日本経済は従来の特需依存を脱却して正常で安定的な成長軌道を歩み始めた。この年の貿易黒字は5億円に達し、加えて空前の米の大豊作もあって物価は安定基調にあった。白書の観測は、こうした動向をふまえたものだった。この見通しは、この年から翌年にかけてのいわゆる「神武景気」により実証されることになる。しかしこの白書で持ち込まれた“戦後”という用語は経済的な側面しか含んでいないように思われる。

この点については『昭和史・戦後篇』では著者の半藤一利氏は次のようにコメントをしている。

この年の産業全体の生産指数は、戦前の最高水準（昭和19年）を突破しました。輸出が急激に伸びて、国際収支危機も解消し、GNPは10パーセントの伸びを達成したのです。そういう時代ですから、「もはや戦後ではない」のキャッチフレーズは国民の胸に大変強く響いたわけです。（中略）要するに、日本経済は発展するのだから、いつまでも戦後気分であるのではなく、国民は高度成長の条件をしっかりと承知して実践していこうじゃないかと経済白書で主張したわけです。⁷

敗戦後の日本の様々な混乱状態は、確かにアメリカ合衆国による日本の占領が終わった1952年には収まっていた。新しい憲法も施行されていた。朝鮮戦争が終わった後、日本経済は目覚ましい回復を見せていた。しかし、アメリカによる沖縄の占領が続いており、日本各地にアメリカの大きな軍事基地が存在していたし、今でも存在している。他にも諸々の問題が処理されないまま、今も取り残されている。

戦後の始まりがあれば、“戦後の終わり”という表現もあっておかしくないと考えられるが、しかし、ここで改めてこの“戦後”という言葉の本当の意味を考えてみたい。前述したように、“戦後”という言葉のもっとも素朴で分かりやすい意味はつまり、戦争では多くの破壊が行われるため、戦争が終結した後は、社会体制などが新しく作り直され、価値観まで変化するのである。ところが、これは日本が敗戦国であるという視点ならでの定義である。戦勝国なら、戦争で勝っているのに特に社会体制を新しく作り直す必要もなければ価値観を変える必要もないのであろう。上にみたように戦後の意味について色々な定義や見方があるが、敗戦国にとっての“戦後”というのは、敗戦による物理的なダメー

ジを処理し、経済を立て直し、独裁政権でなければ、それこそ政治体制の作り直しであるといえる。また、敗戦によってその国が外国勢力によって占領されたとしたら、やはり占領体制をなくした上で完全な主権国家の体制を取り戻すことである。そして、戦争のときに敵だった国々との関係回復、関係正常化を政府のレベルや国民のレベルにおいて確立することである。ここで忘れてならないのは敗戦国における国民の精神的な立ち直り、自分の文化や伝統に対する自信の回復のことである。

3. エジプトの戦後と日本の戦後

(1) エジプトの戦後

日本の“戦後”の理解への試みとして、ここでは参考にエジプトの“戦後”について触れてみたい。

エジプトの歴史を繙いてみるならば、むしろこの国は今から二千数百年も前から、ずっと様々な民族の侵略や占領や殖民の対象になりつづけてきたのである。1952年の軍事クーデターにより、ナギブ将軍が二千何百年ぶりの純エジプト人支配者として誕生し、そして間もなく純エジプト人のナセル政権も誕生してくるわけである。エジプトが受けた最後の長い占領は、1882年から1952年まで続いたイギリスによるものである。最近では1967年から1973年までの6年間、エジプトはイスラエル軍によって部分的な占領も受けていた。入れ代わり立ち代り様々な侵略や占領に慣れたエジプト人にとっての占領は、この意味においておそらく日本人の場合とはそのインパクトが大分違うのではないかと思う。すなわち、日本の場合、敗戦まで日本はいわゆる“神の国”でカミカゼに守られていて絶対他民族によって侵略されることはない、と固く信じられていた神話が崩れてしまったインパクトはおそらく想像を絶するものだっただろう。

エジプトは数千年前のファラオ時代から、国の拡大という錦の御旗のもとに周辺の国や民族を攻めたり、また逆に隣国もしくは遠国や遠方の民族に侵略されたり植民地にされたり繰り返してであった。しかし2300年ほど前からエジプトはずっと侵略される一方であった。南のヌビア民族、西からはリビア人、東からはペルシャ人、グreekローマ人、ギリシャ人、中央アジア人やトルコ人、そして北からはヨーロッパの十字軍などの様々な民族の侵略や事実上の支配を受けてきたわけである。近代では、オスマントルコ帝国に300年以上、フランスに3年、そして最後にイギリスに70年の占領や支配を受けてきたのである。エジプトは地理的には古代世界の中心に置かれていたし、穀物の富もあったし、アジアとアフリカそしてヨーロッパとも陸続きであったことによって周りの民族との接触が濃密に行われていた。これで戦争が数え切れないほどあったし、ゆえに“戦後”という経験がどれほどあったことであろう。そこで話を近代エジプトに限定しておきたい。

エジプトにおいて日本の太平洋戦争に当たるのは、どちらかといえばやはり第二次世界大戦のことになるだろう。当時エジプトはイギリスの占領地だったためこの戦争のとぼっちりをうけてしまった。エジプトの北部、地中海沿岸の広い地域がロンメル将軍指揮下のイタリア軍とイギリス軍による第二次世界大戦最大の戦車戦の舞台となった。アレキサンドリ

アヤカイロ周辺への小規模な空爆をのぞいて、エジプトの都市はこれといった被害を受けていないし、エジプト国民もこの紛争に直接関わっていなかったので、エジプト人にとってはこの戦争が終わってからの“戦後”の気運はなかったと思われる。確かにロンメル将軍部隊のエジプト進撃によってエジプト独立運動の活動家が刺激を受け、よって数年後にエジプト軍のクーデターやナセルの登場があったが、これは日本の“戦後”と比べる次元がまったく違うであろう。

エジプトの“戦後”と呼べるとするならば、それは1967年6月の六日戦争の後のことにあたるのではないかと思う。エジプトはイスラエルを相手に1948年から1973年まで4つの戦争を経験してきている。そのなかで3回目の戦争、つまり1967年の六日戦争のインパクトがもっとも大きかったと言える。なぜならば、エジプトの近代史において、エジプト人がこれほど苦い敗北を味わったことはなかったからである。六日戦争と言っても事実上、戦争の最初の日から勝敗が決まっていた。エジプトの夏の朝、雲一つない青空にイスラエル空軍の約200機が一斉にエジプト全土の空軍基地に奇襲をかけた結果、滑走路にきれいに機体をさらけ出して並んでいたエジプトの戦闘機のほぼ9割が1時間以内に無残な鉄屑状態に変わり果てていた。エジプトの国土の95パーセントは不毛な砂漠であり、制空権を握った側が間違いなく短期間で勝利をおさめる。まるで裸状態になったエジプト陸軍の兵士たちはイスラエル空軍の格好の餌食になってしまった。そして6日間にわたって300キロメートルの距離に及ぶイスラエルとエジプトの国境地点からスエズ運河まで、武器を捨てて無防備で敗走を強いられたエジプトの数万人の兵士たちが集団殺戮の対象になってしまった。正に“鉄の暴風”がエジプトに吹き荒れてしまったのだ。6月9日の夕方にナセル大統領は何の前触れもなくテレビの画面に現れ、エジプト軍の敗北や自らの辞任声明を国民に発表した。その日まではエジプト国民は中東最強と言われ続けてきたエジプト軍の絶対勝利を信じ込んでいたし、アラブの英雄たるナセル大統領のことも信じ続けてきた。

当時11歳だった私はテレビの前で固唾を呑みながら釘付けになっていた。数分だけの短い辞任声明だったが、それを聞いている間に、私の幼い心の中で、今まで信じ込んできたナセルや無敵エジプト軍の神話が碎け散ってしまったのである。その瞬間から自分やすべてのエジプト人の“戦後”がはじまったわけである。

エジプト国民の熱い要望に応じてナセル大統領はその辞表を取り下げた。その後は“敗戦の後遺症をなくそう”というスローガンが当時のエジプト人の原動力となり、流行語にもなったという経緯がある。エジプト軍の再建、経済回復という大変な作業、敗戦の責任を問われたエジプト軍幹部の軍事裁判などの様々な措置によるエジプトの“戦後”がはじまった。これと同時に政府をはじめ、エジプトのすべての報道機関がエジプト軍やエジプト国民の心の傷を癒し、士気を鼓舞するのに必死になった。しかしナセル大統領にはあまりにもこの敗北の衝撃が強すぎたせいか、それから3年も経たないうちに50歳の若さで還らぬ人となってしまった。これも敗戦の大きな後遺症だと思うのである。

この戦争の結果、6万平方キロメートルにも及ぶ広い面積のシナイ半島の砂漠がイスラ

エル軍に占領され、2万人ぐらいのエジプト人兵士が戦死し行方不明になった。被害は大きかったものの、民間人の被害は少なかったし、スエズ運河沿いの都市をのぞいては、大都市も空爆の対象にならなかったことや、国家の主権も奪われなかったことなどで、国の政治体制もそのまま継続していった。六日戦争から6年ぐらい経過した時点でエジプト軍は反撃をかけスエズ運河地帯を奪回し1982年4月にはシナイ半島は完全に解放された。ヨルダン西岸やガザ地区の占領、またパレスチナ住民の弾圧が続いているため、今現在でもエジプト一般大衆のイスラエルに対する感情的な思いが残っているものの、両政府のレベルではやりとりが行われていて、これで一応エジプトの“戦後”が終わっているのである。この意味においては日本の敗北は凄まじいものだったということがしみじみと感じられるのである。

それでは、エジプトの例に比べて日本の“戦後”の始まりはどこにあるのか。そして、それが終わったのであれば、どのような形でどの辺で終わったのであろうか。またそんな中で日本文学はどのように展開していったのであろうか。

(2) 日本の戦後

1945年8月15日に始まる“戦後日本”の歴史は“占領下の日本”で始まるわけである。アメリカ占領軍による軍事占領の当面の目的は、日本の武装解除と非軍事化であり、それにもとづいて軍隊の解体・軍需工場の解体・戦争犯罪人の逮捕が相ついで行われた。1945年10月以降、設置された連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）は、戦前・戦中の天皇制による支配のための政治的・法的・社会的・経済的諸制度・機構やその基盤の解体と民主化のための指令をつぎつぎと発した。そして10月11日にはGHQはいわゆる「5大改革指令」を当時の幣原喜重郎内閣に提示した。その内容は、婦人の解放・労働組合の助長・学校教育の民主化・民衆生活を恐怖に陥れた制度の廃止・経済機構の民主化であった⁸。また、GHQは、日本の非軍事化を実現するために日本の4大財閥（三井・三菱・住友・安田）の解体方針をすすめた。そして、財閥の復活を防ぐため、独占禁止法や過度経済力集中排除法が制定され、戦前来の財閥を中心とする独占的な経済支配体制の解体が推し進められる⁹。日本はこれで大きく国柄を変えてしまう。中でも一番大きな改革政策を列記すれば、まず象徴天皇制になり、主権は国民にありと決められたこと、同時に議会制民主主義が確認されたこと、他に先述した大財閥解体、そして農地改革、言論・表現・結社の自由などが挙げられる。結果的にはこの“占領下の日本”つまり **Occupied Japan** が、好むと好まざるにかかわらず、戦後日本の骨組みをつくったと言えよう。

半藤一利氏は著書『昭和史・戦後篇』で“戦後日本”の時代を次の6つの過程に区分している。

- ・ 占領の時代 (Occupied Japan) ・ 1945年～1951年
- ・ 政治闘争の時代 (サンフランシスコ講和条約による独立日本のスタートから60年安保まで) ・ 1952年～1960年

- ・経済第一の時代（強兵なき富国・無思想の商人国家）・1961年～1965年
- ・自信回復の時代（高度経済成長の真っ盛りで、かつて敗戦で打ちひしがれ、憐れを極めた気分はどこへやら、日本は大変立派な国なんだと国民一人ひとりが自信をもつようになった・東海道新幹線の開通・東京オリンピック開催・大阪万博の開催・沖縄返還）・1966年～1972年
- ・価値観の見直しの時代（経済最優先で頑張ってきた日本人はなんとなく空しい気分が湧いてきてもう一度考え直したほうがいいのではないかと感じ出した）・1973年～1982年
- ・国際化の時代・1983年～1989年

戦後日本は、アメリカのドルと核の傘によって統一的に編成された世界資本主義体制の一環であり、「ドル・円一体化」の経済とアメリカとの従属的同盟関係を形付けた「日米安全保障条約」を特徴としている。日本にはまた1960年の第一次安保闘争の騒動がおさまってから、どういう国家をつくるかについて四つの選択肢があった。まず一つ目は、戦前のように天皇陛下を頭に戴き、陸海軍を整備した、いわゆる“普通の国”になることである。二つ目は、左翼が主張するところの社会主義国家である。ソ連の傘下に入るという意味ではなく、アメリカ的な資本主義からは距離を置いたかたちの国家をつくるという意味である。ある意味では「共和国」のことであろう。また、三つ目は、軽武装・通商貿易国家、すなわち、吉田茂首相が行おうとした「経済第一で豊かな国を作ろう」という選択である。最後の四つ目は“小日本”で、一切のごたごたに関与しないような文化国家、まさに“東洋のスイス”のようなもので、「自分たちが静かに平和に生きていこうじゃないか」という選択である。結果的に「軽武装・通商貿易国家・経済第一の国をつくろうじゃないか」という方針が決まり、国民も合意し、日本はその方向へどんどん進みだすのである¹⁰。

実は、半藤一利氏の戦後の時代区分は天皇崩御、いわゆる昭和時代の終焉の時点において途切れている。本のタイトルが『昭和史』だからこそ自然な締めくくり方だと思うが、同時に“戦後”が昭和天皇の崩御とともに終わったと考える人が多いようである。昭和天皇崩御の年の1989年12月29日、経済大国日本は最高に輝ける日を迎えた。その日は東京証券取引所の平均株価が史上最高値を記録したのである。戦後日本をつくってきた軽武装・経済第一の貿易通商国家がここに完成し、最高に輝いた瞬間であったと言える。しかし、それから2年ももしないうちに冷戦の終結や湾岸戦争の終わりとともに株価が急落し、バブルがはじけてしまった。日本経済の繁栄は平成2年にガラガラと崩れ落ちてしまうわけであった。

4. “戦後文学”と“戦後の文学”

“戦後”とは文字通り戦いの後ということになる。しかし、すでに述べたように、この戦いというのは日本にとっておそらく満州事変から太平洋戦争終結までの15年間のこ

とになるのであろう。

したがって、この時点から後に書かれた小説は「戦後小説」つまり「戦後文学」ということになる。しかしそのように決めてしまう場合、戦後に書かれたすべての小説が「戦後文学」という意味になってしまう。といってもこれは完全に間違っているとはい切れぬ。ここで問題として取り上げようとしている「戦後小説」もしくは「戦後文学」とは、おそらく内容的に戦争もしくは敗戦の影響によって戦後日本社会に何らの形で取り残された様子が見出されるものことではないかと思う。そのような意味での「戦後小説」ないし「戦後文学」を解釈するに際して多数の論文が書かれ、様々な意見が存在する。そこで自分自身にとっての“戦後”という言葉の意味をあえて“敗戦の後遺症”というふうに解釈し、なお“戦後の終わり”のことを“敗戦の後遺症からの立ち直り”というふうに見なしたいと思う。

一般的には“戦後文学”という用語を戦後すぐの時期から現在までだいたい10年毎に区切りをつけて展開している。それが、第一戦後派・第二戦後派・第三の新人・第四の新人・内向の世代・両村上の世代・ボーダーレス世代そしていわゆる“オンライン・電子文学の世代”とだいたい区切られるのである。しかし、これはどちらかと言えば、終戦後に書かれたあらゆるジャンルの小説のことであって、かならずしも敗戦がもたらした直接あるいは間接的な諸々の意識を含んだ小説とは限らない。よってこれらをひっくるめて“戦後の文学”もしくは“戦後の小説”と呼んでも差し支えないと思う。

一方、逆に敗戦の後遺症を含めて、敗戦がもたらした直接あるいは間接的な諸々の意識を含んだ小説もしくは文学のことを“戦後小説”もしくは“戦後文学”と呼んだ方が妥当ではないかと思う。この意味においては“戦後の文学”はずっと戦後から今日までそしてこれから先もしばらくは続くであろう。前述した歴史的な意味の“戦後”に添っていけば“戦後の文学”とはすくなくとも昭和の終焉までの45年の期間をカバーしている。

それでは、日本戦後文学は“戦後”をどのようにとりあげたのであろうか。そして、はたして日本戦後文学においては“戦後”に終止符が打たれたと言えるのであろうか。

1945年8月15日で一線を引いてそこから先が“戦後文学の始まり”と想定する場合、いったい日本の戦後文学はどのような状況の中でスタートしたのであろうか。そのとき日本の文壇ではすでに認められていた日本人小説家にとって敗戦は無論未曾有の体験であった。あるものは茫然自失し、あるものは虚脱した。あるものは慟哭し、あるものは解放の喜びを覚えた¹¹。しかし、確かなことは自分の青春時代に戦時下を生き、敗戦を迎えた戦後に文壇に登場した新しい作家たちは、作家としての内面がその体験によって大きく形成され本当の意味での“戦後文学”ないしは“戦後小説”の旗手になったであろう。

佐古純一郎氏は『文学の探求』で「現象的には確かにわたしたちの戦後文学は、これらの老作家たち（谷崎潤一郎・永井荷風・武者小路実篤・宇野浩二など）の作品で出発した。しかしそれらの作品はどう考えても、アプレ・ゲール（戦後派）の文学とは呼び得ないのであって、そういう意味では、はたしてそれらの老作家の作品をもって戦後文学の出発点とすることが適切であるかどうかは、問題の存するところであろう¹²と述べている。

ところでこの老作家たちは明治あるいは大正期に作家的形成を終え、15年戦争がはじまるころにはすでに大家として作家的成熟の絶頂にあった。したがって戦争の有無によって彼らの内面は容易にゆらぐものではなかった¹³と思われる。ただ、戦時下の国家の厳しい思想統制は彼らの作品発表を禁じ、執筆を停止させたにすぎないのではないかとと思われる。敗戦後に書かれたこれらの老作家の作品は事実上の“戦後の文学”と言っても、先に指摘した“戦後文学”を代表しないのではないかと思う。8月15日の敗戦の日、60代だった永井荷風は中国地方にいたが、日本敗戦の知らせを聞いて「お祝いで鶏をつぶして鍋にして食べた」と自分の日記に書いた¹⁴。老作家たちの他に戦争が終わってすぐに文壇に現れて創作や評論活動をはじめたのは元プロレタリア文学作家たちなのである。その例として宮本百合子、佐多稲子、中野重治、徳永直、壺井繁治などの名前があげられる。彼らにとっては、敗戦はむしろ日本軍国主義の敗戦であって日本国民の敗戦ではなかった。そこで彼らはむしろ“終戦”という言葉を好んでいた。彼らにとって終戦は解放であって勝利でもあった。元プロレタリア小説家たちはさっそく「新日本文学会」を結成していわゆる“民主主義文学の創造”という命題を掲げて動き始めた。戦争中沈黙を強いられてきた彼らは一日も早く創作活動を始めたがっていた。占領軍の推進した一連の民主的改革は、マルクス主義思想をもっていた彼らに民主主義革命の実現が近づいているという幻想を与えた。日本共産党は、占領軍の手によって日本における民主主義革命の端緒が開かれた、と考えていた。その作家たちの一部は、天皇制の打倒、そして人民の総意に基づく人民共和国政府樹立のばら色の夢さえ見ている。当時、本多秋五、小田切秀雄、平野謙、佐々木基一などのような戦前のプロレタリア文学運動ともかかわりの深かった批評家が寄り集まって同人雑誌『近代文学』をつくった。当然先ほどの『新日本文学』のグループが後者のグループとの連帯の可能性を期待した。しかし、戦後の文学史はそのような簡明な進行を示さなかった。そのあとは「政治と文学」、「戦争責任論」、「転向論」などの問題をめぐって、両グループの間で激しい論争が展開されるようになった。また、「新日本文学」グループが叫んでいた「自由」とか「民主主義文学」とか「天皇制排除」などの騒ぎに水を浴びせるような感じで鋭く批判した評論家が何人かいた。そのなかに河上徹太郎の書いた「配給された『自由』」というエッセイがある（東京新聞・1945年10月26～27日）。すなわち、ここで河上氏は日本がそのとき置かれている「被占領国」という厳しい現状に読者を目覚めさせ、今の日本の自由と民主主義とは、全面的に日本国民の手でもたらされたものでないという事実を突きつけたわけである。また何年か経ってから（1952年6月）中村光夫は1945年8月15日以降の文学、とりわけ小説のことを「戦後文学」ではなく「占領下の文学」と呼んだのである。彼はさらに突っ込んで、いわゆる「日本文学」について、「それはアメリカの占領政策から生まれたものであり、全体としては占領政策のひとつの現われと見るのが、おそらく正しい」とさえ言っている。そして、「占領の期間中、我国の作家の大部分が浸っていた不思議な自由感、あるいは解放感とは何か。（中略）この「自由」あるいは「解放」と（隷属）とが二重映しのものだ」との痛烈な批判をしている。この点について、伊豆利彦氏は「戦後の文学における敗戦の意味」という題の論文で、宮本百合

子が敗戦直後に書いた『播州平野』を批評して次のことを言っている。「しかしこの「解放」をもたらしたのは「海を越えてさしてきた光」であって、日本国民が自力で解放したのではない。日本は完全に占領軍の支配下にあり、新聞・雑誌・放送等の言論や映画・演劇にいたるまで、いっさいが占領軍の検閲統制を受けた。もちろんそれは政治犯を釈放し、治安維持法を撤廃した。そして天皇制国家権力を崩壊せしめた。しかし同時にそれは新しい占領行政のはじまりであった」¹⁵

前述した老大家や元プロレタリア作家及び評論家グループの他に、後に「第一次戦後派」と呼ばれた若き作家のグループが登場してくる。野間宏、梅崎春生、椎名麟三、武田泰淳、中村真一郎、大岡昇平などがそのグループのメンバーだと見なされている。日本文学史評論家は一般的にこのグループ・メンバーの特徴として次の要素を定義付けている。

- * 若くして目撃したマルクス主義文学運動の敗退を前提に、戦時下の重圧の中で文学的な自己形成をとげなければならなかった点にある。
- * 「政治と文学」の問題について鋭い問題意識を持つ。
- * 在来の日本的リアリズムと私小説、プロレタリア文学運動を継承する民主主義文学のいずれとも別な方向へと展開していく。
- * はっきりしているのは、題材に直接扱うか扱わないにかかわらず、作者の戦争体験が共通しているところである。その体験がいわば各作家の原体験となって、文学を生み出していること。
- * それぞれ強烈な個性をもった作家ばかりで、しかもその大半は30歳を超え、他からの影響を容易に受け付けられないほど確固たる文学的世界を最初からもっていたことである。
- * 人間の把握と表現が、従来の狭い枠を越えて、より広い社会的視野を持つようになり、作中人物よりも、その置かれた状況や事件の比重が大ききことである。

第二次戦後派と呼ばれる作家は例えば、三島由紀夫、阿部公房、島尾敏雄、堀田善衛などがあげられる。日本文学史評論家の解釈をまとめると、この「第二次戦後派」は1948年、1949年に文壇に登場した新人作家を便宜上、一つの世代としてまとめる総称であり、この世代の特徴は次のように定義付けられよう。

- * 戦前の私小説・心境小説的方法論を捨てた点にある。
- * 日本の近現代文学のなかでは特に海外からの評価が高く、本格的な西欧型長編小説の骨法をはじめ日本に根付いた時期と位置づけることができる。
- * 一方で第一戦後派以来の、社会的問題に積極的に参加する文学者という発想はこの時期にも受け継がれた。
- * 西欧の文学理論、哲学、政治問題に詳しく、社会に対して積極的に発言し、一国の文明を指導する役割を担うという意味で、ジッド的な文学者像が理想とされたのである。

多くの元プロレタリア作家や戦後派（第一や第二戦後派）の作家たちは確かに優れた作品を世に出し続けてきた。しかし、松木新氏の「戦後派文学出発の様相」という題の論文の中の表現を引用してみると、「たしかに、自己の経験の領域に封じ込められており、横

への広がりには欠けている。その意味では、戦前のプロレタリア文学が到達した水準を超えるものとなっていない¹⁶ という見方もあることに気付かされる。

日本の文学史評論家はその次の作家の世代のことをあえて「第三次戦後派」と呼ばないで、まるでその中間をとったような感じで“第三の新人”とわざわざ呼んだわけである。日本文学評論家の服部達氏はこのグループの特質について三つの点をあげている。

* 戦争中に青春を過ごしたこと。

* 観念的高踏的な戦後文学の反動としての、私小説的伝統への復帰。

* 朝鮮動乱の特需による景気回復の社会に登場したこと¹⁷。

言い換えれば、戦後もやや安定期に入り、人々の生活によりやく落ち着きがあらわれ始めると、文学の方面でも日常性のうちに題材をもとめる私小説的傾向の強い作品が書かれたのは、第三の新人の筆によってであった、ということである。そのグループの代表者として、安岡章太郎、吉行淳之介、小島信夫、阿川弘之、遠藤周作、庄野潤三、曾野綾子などがいて、皆、芥川賞を受賞している。彼らの活躍が目立ったのは大体 1951 年から 1955 年までの間のことである。

こうして日本文学史は敗戦から 6、7 年の間を区切って「戦後派の時期」と見なした上、追加の形としてその次の 4、5 年の間のことを「第三の新人の時期」と曖昧に名づけて、合わせて 1955 年までの 10 年の時期を「日本戦後文学第 1 期」というふうに片付けている。1955 年といえば前述のように、企画庁がその年の経済白書に例の「もはや戦後が終わった」という敗戦の暗い時代の終焉を宣言する表現を盛り込ませた年のことである。これは偶然のことではないと思うが、やはりここでは当時の歴史評論家そして文学評論家はともに、朝鮮動乱が終わりサンフランシスコ講和条約が締結され、日本経済が景気回復し日本国民が日常生活上のゆとりを感じ始めた 1955 年のことを境目と見なし、“戦後の終わり”を宣言したと思う。

5. 日本戦後文学の問題点

ここでは「戦後文学」と「戦後の文学」の項で触れたこの二つのフレーズの意義の違いをはじめ、ほぼ定説になっている日本戦後文学の定義やその時代区分が抱えていると思われる問題点を取り上げてみたい。

①日本戦後文学は“戦後文学”ではなく“戦後の文学”である

日本の日本文学史教科書や日本近代文学を紹介する書籍の中で、いずれを読んでも、1945 年 8 月 15 日の終戦（敗戦）をスタート・ポイントとしていわゆる“日本戦後文学”の歴史を展開していくわけであるが、その区切り方としては 10 年ごとが一つの時期にされている。しかし、この区切り方は時間経過の要素や世代交代の要素を想定してきたもので、歴史的にも文学的にも時間経過や世代交代によって敗戦がもたらした影響がそれなりに薄れていくことを前提に組み込まれているような気がしてならない。それで終戦の段階から“第一次戦後派”、“第二次戦後派”の次は“戦後派”という用語が消え、戦後の影響が薄れたつもりでわざわざ“第三の新人”、そして大江健三郎や石原慎太郎に代

表されるいわゆる“第四の新人”が設定されていくわけである。それから先の世代別はまったく違った呼び名が付けられていく背後に、やはり“戦後が終った”という意識が強く働いていると思う。今日までの日本文学のことが“日本戦後文学”と呼ばれ続けても、これは便宜上の用語でかなり大ざっぱで総括的なものだと思う。というのは今使用中の“戦後文学”という用語に、太平洋戦争やその敗戦の影響の有無を問わず、テーマや内容を別として、終戦から現在までの61年間に書かれたすべての日本の小説が当てはまるからである。時間経過や世代交代といういままで通りの区切り方の構想にこだわるのならば、せめて1945年8月15日から1955年までの一時期に書かれた文学作品のことを“戦後文学”、1956年から現在にいたるまでの複数の時期を総合的に“戦後の文学”と呼び分けた方がいままでの“戦後の終わり”に対する一般的な認識が反映されるのではないかと思う。

しかし、それでも大きな問題が残る。果たして1945年から1955年までの戦後小説はすべて太平洋戦争の体験やそれに対する想い、もしくは敗戦後の日本社会の変化や作家の精神的な葛藤などのようなテーマを扱ったのであろうか。むしろそれはそのようなテーマとは限らない。だとすれば、戦後10年の間に書かれた小説のことを“戦後文学”と呼んで片付けるのも正確とは言い難い。むしろそれも“戦後の文学”であってかならずしも“戦後文学”とは限らない。1945年8月15日以降現在にいたるまでのあらゆる文学作品（とりわけ小説）を広義的な意味で“戦後の文学”と呼びながら、時間経過もしくは世代交代という認識ではなくむしろジャンル別もしくはテーマ別で1945年から現在にいたるまでに書かれた太平洋戦争とあらゆる形でその影が投げ落とされた題材をもった作品をまとめて個別に“戦後文学”もしくは“戦後小説”と呼んだ方が細かい区切り方ができるのではないかと思う。

② “戦後文学”の“戦後”の本当の意味はむしろマイナス思考の意味である

1946年に中村真一郎が“戦後”という言葉フランス語のアプレゲール・クレアトリスの日本語訳として使ったと言われる。そしてこのアプレゲールという言葉がはじめて出版物の表紙に載ったのはその当時意欲的な出版をしていた「真善美社」という出版社の出した書籍である。この点は次の点と繋がる大きな部分があるが、1955年の経済白書に載った“もはや戦後が終った”という表現を参考にしても日常的に今まで日本で使われた同じ表現を参考にしても、“戦後”という言葉が内包する意味はただ“戦争の後”という表面的なものではなく、むしろ“戦争の後の苦しみ”もしくは前述のように使ってみた“敗戦の後遺症”というフレーズの意味を指しているような気がする。そこで宮本百合子が終戦を喜んで書いた『播州平野』に代表される元プロレタリア作家グループの戦後小説はむしろ「解放」のよろこびとそれに繋がる未来に対するバラ色の夢の膨らみというポジティブでプラス思考の様子が含まれている。これもまた必ずしも戦後まもなく当時の大半の日本国民の気持ちを代表するような反応ではない。日本人が度を重ねて色々な時期やシチュエーションで肩の荷を下ろすような感じで吹き出した“もうこれで戦後が終った”という言葉はまさか“これで解放が終った”とか“これで民主主義が終った”など

のようなプラス思考の意味を含んでいたとは到底思えない。

③戦争をとりあげた小説がすべて“戦後小説”とは限らない

前述したように、“戦後派”というフレーズが日本文学史に定着しているようであるが、はたして戦場の体験を題材にして小説を書いただけでこの作品が“戦後文学”というジャンルに無条件に片付けられてもよいのであろうか。ただ日記のような気持ちで戦場で見聞きした情景を書いても本当の深く切実でネガティブな意味の“戦後”が伝わるのであろうか。森川達也氏はこの点について次の意見を述べている。「これらの作品のうちには、むろん、彼ら〔戦後派作家〕が実際に経験した戦争体験を、そのまま直接に素材として書かれたものもあるし、そうでないものもある。(中略)けれども、だからといって、戦争体験を直接に扱ったものだけが「戦後」文学の名に値いするわけではない。また逆に、徹頭徹尾、今度の戦争体験を扱っているという理由だけで、それが直ちに「戦後」文学となるわけでもない。重要であるのは、戦争という一個の極限の状況が、作家たちの精神に、どのような変貌をもたらさずにはおこななかったか、ということ」¹⁸。さらに「そこで“戦後文学”というものは単に被害を受けた者の文学だけではなくて、つまり戦争という現実に対面させられて、その現実の中で自分の精神にある決定的な傷を受けてしまう。そしてその傷というものがそれ以後のその作家のありよう、その表現である文学のありように根本的なところで深い影を落としている。そういうものを本当の意味での戦後文学というふうと呼ぶべきではないか」¹⁹

また、山崎正和氏は次のように論じる。「戦後文学というものがもし問題になるとするならば、とりあえず私には、そのようなネガティブな時代に立った文学としてしか意味を持たない。(中略) 事実の記録はおびただしくあるが、戦争を意味づけた文学的証言は意外にすくない。政治的な意味づけのすさまじい氾濫が、あの共通の体験を、文学的に意味づける立場を見失わせたのだろう。流血と飢餓を描いた「戦争文学」はふんだんにあっても、一国の敗北を見つめた厳密な意味での「戦後文学」はすくないのである」²⁰

④第三の新人の文学こそが本当の意味の“戦後文学”のスタートではないか

元プロレタリア文学作家や老大家、そして第一次戦後派や第二次戦後派が活躍しはじめた時期は終戦から大体 1951 年か 1952 年までの 6、7 年の間とされているが、それはちょうど日本がアメリカの占領下に置かれていた時期でもあった。民主主義や言論の自由または解放などいくら綺麗事が言われても、ある国が他国軍によって占領されるという状況はそのような幻想とは真っ向から矛盾する。外国軍の占領下に置かれた被占領国民は自由であるはずでもなければ、言いたいことも言えるはずもないのである。現に当時の GHQ の厳しい検閲体制の下ですべての出版物が細かくチェックされていたし、アメリカ批判はもとより、太平洋戦争の正当化や賛美、戦争中の日本兵による玉砕の賛美や評価などはタブーであった。またそのときの政治的な混乱、社会的及び経済的な混乱や混沌とした状況を考え合わせた場合、健全で自分の気持ちに正直な文学的表現ができるような環境であったとは到底思えない。第三の新人といわれるグループが現れた時期はすでにアメリカの正式な占領体制がほぼ終わっていて検閲体制が緩和されてきていたし、敗戦から 6、7 年もすぎて

いたので少しは冷静な眼差しであの戦争そしてあの敗戦後からの展望が、その前の戦後派世代に比べて見え始めてきていたはずである。このような位置から第三の新人の作品を丁寧に読み直していけばきっと今までと違った批評が展開されていくだろうと思う。

⑤沖縄出身の若き作家が沖縄戦の記憶を未だに語り続けているのに、どうして日本の戦後文学における真の意味の“戦後文学”が終ったと言えるのか

日本の戦後文学の各時代や性格の区切り方を見ると、沖縄の戦後文学の影がとても薄いような気がしてならない。本当はこのような判断を下す前により多くの論文や批評をこれから読まなければならないと思うが、今まで読んできた複数の論文に対する感想としては確かにその通りだと思わざるをえない。私は沖縄戦後文学のことを考慮しながら、もう一度第一次戦後派の段階から戦後文学の歴史全体を整理し直したらとても面白い作業が行われると思う。いや、むしろ敗戦から60年以上経っている今だからこそ、評価の移り変わりという営みにしたがって日本の戦後文学をこのような形で整理し直し、読み直す必然性があると思う。沖縄の戦後文学なくしては日本の戦後文学が語れないと思うからである。

沖縄の特殊性のある歴史的な要素も文化的な要素であることはいまでもないが、戦後、沖縄が本土と違った状況に置かれたことがもっとも大きな要素だと思う。本土のアメリカによる占領は一応1952年に終了したものの、沖縄の占領は1972年まで続いた。また、本土に対する占領はある意味では間接的なものだったのに対して、沖縄はアメリカ軍の直接的な支配下に置かれていた。そして沖縄が日本本土に返還されても、事実上米軍基地との共存が日常的な状況となっている。このような状況が沖縄の戦後文学に大きく影響しているのも当然のことである。そしてこのような影響は返還の時点で止まったわけではない。現在でもその影響が強く残っている。いや、残っているというよりむしろ沖縄の現代小説の中心的な課題といっても過言ではなかろう。

沖縄の小説というと、だいたい三つの柱が普通考えられている。一つは沖縄戦である。その体験が文学作品にどう生かされるか。二つ目は基地の問題。基地の中で生きるとはどういうことかということ。三つ目は沖縄文化の特殊性を訴える民俗学的な題材である。いずれもこの3点の中に戦後の後遺症が深く根ざしていると思う。

沖縄の最近の小説には、沖縄戦や太平洋戦争の記憶を中心テーマに取り上げた幾つかの作品がみられる。これらは、『ダバオ巡礼』(崎山麻夫作)や『南風青人の絵』(国吉真治作)や嶋津与志の作品『骨』である。このなかで、『骨』と『南風青人の絵』という2作のモチーフが沖縄戦となっている。一方、『ダバオ巡礼』は戦争中にフィリピンのジャングルで命を落とした沖縄出身の少女の亡霊をテーマに取り上げている。他に1997年の目取真俊の芥川賞受賞作品『水滴』と、同じ短編集に含まれている『風音』も沖縄戦の記憶が中心テーマとなっている。

1992年に大城立裕氏が発表した『日の果てから』には、沖縄でほとんど着のみ着のまま家を逃げ出し、あっけなく砲弾や銃や火炎放射器で殺されてゆく人々が無数といっているほど出てくる。もちろんこの作品も明らかに沖縄戦の記憶を中心テーマにあげている、歴とした日本の戦後文学の骨太い作品である。

多くの「戦後文学は終わった」という断言にも関わらず、まだ“戦後”が終わることを許そうとはしない各世代の沖縄出身小説家がそこにしっかり生きているのではないか。

結論

1967年のエジプトの敗北から1973年のシナイ半島奪回を目標にした10月戦争までの6年がエジプトの短くて“長い”戦後であった。自分の50年の人生においてはこの6年がなぜか、月日が過ぎていくのが最も長く重苦しく感じた時期であった。しかしその中から常に自分や周りの人たちに希望を与えてくれるような淡い光がさし込んできているような気がした。大きな敗北が心の中に起こした挫折感、支配層への不信感、物資不足で充満する明日への不安。非常に混沌とした悲惨な状況であったが、シナイ半島奪回や自信喪失を取り戻すことなどのエジプト国民を団結させた目標を目指してエジプトは自国の独立を維持しながら自国軍の再建や再武装を着々と進めていった。しかしそれに比べて日本が戦争に負けてからの6、7年の間、つまりGHQ占領体制下に置かれて日本の戦後が始まった時期は、エジプトのそれとは根本的に違った心理状態にあったわけである。序論のところで述べたように、近代史において日本ほど敗戦によりこれほど重なり合った災いをこうむった国は珍しいのではないかということである。日本はエジプトと違って、徹底的に叩かれてしまったわけである。当時の日本国民は、立ち直って抵抗し、占領軍を追い出して自らの手で解放を勝ち取るという希望を与えてくれるような光がさし込んでくる状況ではなかった。そんな状況の中でエジプトでも日本でも暗中模索状態の文学創作活動、いわば“戦後の文学”がスタートした。

6年にわたるエジプトの“戦後時代”には、多数のエジプト人の小説家や詩人が広汎な創作活動を試みた。しかしこの活動のほとんどが国民の志気を高めるためのエジプト政府による“戦後処理”政策の一環であった。そのせいか、エジプトの文壇には焦りが見え隠れしていた。むろん当時のナセル政権の敗戦責任を問うような文学活動は許されなかった。そこで当時、文壇の大きな部分を占めていたマルクス主義系の作家たちは口封じされていた。「言論の自由も民主主義も戦争責任も訴える状況ではない。むしろ国民が一つになってシナイ半島奪回のために頑張るべきだ。勝ち鬨をあげるまで無用な議論を止めよう」という、当時のエジプト国家責任者の言葉の響きが未だに耳に残っている。シナイ半島奪回るときエジプト政権は替わっていた。サダト大統領時代に替わってから比較的言論の自由の機運が訪れ、敗戦当時のナセル体制の敗戦責任を指摘する文学作品が次々発表されるようになった。そのとき、文学作家たちは冷静な眼差しで戦後時代を見つめ直し、骨太い作品を創作していったわけである。今でもあの時代に起きたことを題材とする、色々な側面、色々な思想からの文学作品、映画やドラマがあとをたたない。敗戦後40年ぐらいい経っている今こそ現在の様々な変化の中で、あの時代の状況を掘り起こせば、新たな事実、新たな見方が生まれてきて、エジプトの“戦後”がより鮮明に見えてくるのではないかと思う。そこで日本の若き文学者、そしてこれからさき、生まれてくる文学者の世代による、いわゆる“戦後文学のアルケオロジー”によって私は日本の戦後文学の新たな

展開の可能性を信じている。富岡幸一郎氏が1982年から1986年までの間に断絶的に発表した「戦後文学のアルケオロジー」という題の一連の論文では「昭和32年生まれの戦争も敗戦も、また廃墟も直接に知らぬ世代、戦後文学の時代を体験的に知らないからこそ、私は戦後文学を読み得ると考えたのであり、論じてみたかった」²¹と書かれている。

中村光夫の「占領下の文学」（1952年6月）では、「戦後の「混沌」が一つの幻影であり、夢想であったとすれば、占領下からの解放という第2の終戦を迎えて自立すべき我々はいかなる「精神」を、思想を持ち得ているのか。（中略）また「戦後」における「変革」が真に文学の形をとるためには、1940年代の後年に生まれた子どもたちがすくなくとも20歳になるまで待たねばならぬ筈だ」と言っている。

日本では「戦後が終わった」というフレーズが敗戦のときから1980年代の後半まで、様々な出来事がある度にもはやされてきた。すなわち、GHQ占領体制が正式に終わったとき、日本経済が初めて黒字を記録したいわゆる「神武景気」のとき、サンフランシスコ講和条約が締結されたとき、『太陽の季節』が出版され“太陽族”が流行したとき、「三種の神器」ブームのとき、東海道新幹線が開通したとき、東京オリンピックが開催されたとき、沖縄返還のとき、小野田寛夫の本国帰還のとき、昭和天皇が崩御したとき、石原裕次郎や美空ひばりが亡くなったとき、などである。考えてみれば、日本国民にとってホープフルで敗戦の亡霊を取っ払うような出来事がほとんどだが、同時に「ローカル」で都合のいい出来事なのである。言い換えれば日本人は自分の色眼鏡を通してしか“戦後”を見つめてこなかったということである。しかし角度を変えてみるなら戦後の“ねじれ”が精算されないまま未だに奥深いところに潜んでいる映像が色々な形で浮かび上がってくる。そしてその映像の映し出しを可能にするのは、望もうと望むまいと、日本が様々な国際の場に出たときの様々なシチュエーションなのである。

国内的な事柄と思い続けてきた歴史の教科書作成や編成が知らぬ間に中国や韓国との深刻な問題に発展していった未だに解決されていない。この騒ぎがピークを迎えたのは1986年の藤尾文部大臣による問題発言のときであった。中曽根元総理をはじめ小泉前総理にいたるまでの日本首相による靖国神社参拝が起こし続けてきた中国や韓国の反発。韓国慰安婦問題、中国との間の尖閣列島を巡る領土問題、韓国との間の竹島をめぐる領土問題などが取り上げられる。北朝鮮による日本人拉致問題や核ミサイル実験そしてその後（特に最近）起きている日本のメディアをあげての北朝鮮バッシングなどのエスカレーションが目立つが、もしかすると両国間の緊迫の発端は、太平洋戦争の処理の仕方という意外なところにあるのかもしれない。見方を変えれば戦後から今日まで続いていて、さらに最近新たな展開を見せている日本とアメリカの日米同盟関係、そしてそれによる在日（本土）米軍駐留及び在沖米軍駐留は北朝鮮にとっては脅威そのものかもしれない。逆にここでは北朝鮮の日本への“不信感”という意外な映像が浮上してくるわけである。そこには日米同盟という敗戦構造の遺産が根強く存在していることを否定できないであろう。戦後はやはり終わっていない。

2年ほど前、北京でアジア・サッカー大会が行われた。決勝戦は日本と中国の試合だっ

た。日本はその試合で勝ってアジア・カップを勝ち取ったが、その後で起きた日本代表チームに対する敵意に満ちた中国人の若者サポーターの暴動の記憶はまだ生々しいはずである。ここでは太平洋戦争の付けが思いがけなく戦後第三世代の若者にまわってきた。戦後が終わったとは言えない明らかな例である。

アジアを離れて中東という意外なところへ眼を向けてみよう。日本はとうとうアメリカとの日米同盟関係の一環としてずるずると第三国の紛争の泥沼に足を踏み入れる過程に入ってきている。戦力の不保持と交戦権の放棄をうたった憲法第九条は、日本がアジア諸国をはじめ世界に向かって再び侵略行為を行わないという約束であった。しかし、今や日本はこれを改定して集団的自衛権を打ち出し、米軍の9.11事件後の世界戦略に付き合わざるを得ない立場に立たされている。イラク戦争については、戦争前に国連安保理は分裂し、常任理事国5カ国のうちフランス、ロシア、中国3カ国は反対し、欧州でも敗戦国として日本と同じような立場にあったドイツが反対した。その中で日本は米国の戦争を支持した。“復興支援”という名の下で自衛隊は占領下のイラクに入って2年半近く駐留した。しかし、見る角度を変えてアラブ大衆の側からすれば日本の自衛隊はどう見ても多国籍軍に参加した他の軍隊と何の変わりもない。今までアラブ大衆の目に映っていた平和主義日本の姿はもはや消えているのである。自衛隊のイラク派遣は、あくまで日米同盟の延長上で行われたという常識を彼らはもう知っているからである。日本政府はイラク戦争に際して、従来の国連協調よりも日米同盟を優先した。しかし、アメリカの単独行動主義によってイラク政策は行き詰まっている。今イラクの重大な岐路で、日本の責任が問われている。結局、ここでも敗戦後の「日米運命共同体」と平行線をたどってきた「憲法第九条」維持論との矛盾の反動が、思いがけなく遠いイラクであきらかに現れ、61年経ってもその付けが日本に回ってきているのである。

時間が経てば経つほど経済大国である日本の国際社会に対する貢献や積極的な役割が問われてくる。そこで日本は国際舞台に出れば出るほど眠っていたはず、葬ったはずの戦後の記憶に次々ぶつかってしまうのが現状ではないであろうか。時間が経てば経つほど、そして戦後の新しい世代が登場してくることによってあの戦争の記憶が薄れていくのではなく、むしろ今まで見えなかったものが返って鮮明に見えてくるようになるだろうし、日本を離れて遠く行けば行くほど日本の姿が今までとなくはっきり見えてくるであろう。

そのときは初めて日本は、戦後時代にどのように終止符を打てばいいのかという別の視点からの歴史的総括の努力が始まるであろう。

ここでは日本文学者の出番が問われるであろう。このような国際情勢の中の日本をみる場合、前述したように、太平洋戦争や敗戦時代の精算されなかった付けが次々回ってくることに気づかれることであろう。従って“戦後”が終っていないことがこれで確認できるであろう。戦後の歩みとともに戦後の文学もそれに併せて動きだした。戦後体制の下で生まれた様々な固定概念に影響されて日本の戦後文学も左右された部分大きい。今や戦後史の認識が変わるにつれて、戦後文学が取り上げられるような新しい材料が見つかるはずである。いままでの日本中心のローカルで狭い視点を変えて、他者の目を借りて、立場

を変えてあの戦争や戦後日本を見つめ直せばきっと“戦後文学”の新たな展開が期待できると思う。

“戦後文学”の終焉を宣言するには、まだ道程が遠いような気がしてならないのである。

- 1 新村出編『広辞苑』岩波書店、1991年、1461頁
- 2 『学研新世紀百科辞典別冊・最新技術用語 360』学習研究社、1987年、1053頁
- 3 『日本史辞典』岩波書店、1999年、322頁
- 4 『フリー百科事典・Wikipedia』
- 5 『日本全史（ジャパン・クロニク）』講談社、1991年、1089頁
- 6 鈴木貞美「天皇制と戦後文学」『文芸』河出書房新社、1985年、305～310頁
- 7 半藤一利『昭和史・戦後篇』平凡社、2006年、408頁
- 8 『新編日本史辞典』東京創元社、1990年、570頁
- 9 『日本全史（ジャパン・クロニク）』講談社、1991年、1089頁
- 10 半藤一利『昭和史・戦後篇』平凡社、2006年、537～539頁
- 11 松原新一・磯田光一・秋山駿編著『戦後日本文学史・年表』講談社、1978年、19頁
- 12 佐古純一郎『文学の探究』審美社、1967年、192頁
- 13 大西巨人・川村湊「戦後文学の有効性を問う」『群像』1995年、155頁
- 14 『新潮日本文学辞典』新潮社、1998年、670頁
- 15 伊豆利彦「戦後の文学における敗戦の意味」『日本近代文学会』三省堂、1968年、4頁
- 16 松木新「戦後派文学出発の様相」『民主文学』新日本出版社、1987年、106～107頁
- 17 中村光夫『日本の現代小説』岩波新書、1975年
- 18 森川達也「現代文学の方法」『国文学・解釈と鑑賞』第44巻13号、49～50頁
- 19 森川達也「戦後文学は終わったか」『日本文学誌要』法政大学出版、1974年、79頁
- 20 山崎正和「偽せの終末・戦後文学論」『季刊藝術』季刊藝術出版、1969年、48頁
- 21 三好行雄ほか『日本現代文学大事典』明治書院、1994年、520頁

ABSTRACT

The “After War Phenomena” of the Japanese Literature after the War: Has It Really Come to an End ?

When we consider past theses concerning criticism and arguments about the theme of “Japanese Literature After the War,” we realize the necessity to deeply reconsider the meaning of the term “After War” from the point of view of Japanese history, while keeping in mind the whole story surrounding the background and formation of this term. In my own opinion, this term suggests a link with the meaning of what may be called “the War Defeat Syndrome.” In the Japanese Academic community there is a common notion that the “After War Phenomena has vanished from the Japanese novel. I doubt that Japan has already overcome what may be called “the War Defeat Syndrome.” We may think that when time passes and when a new generation comes, memories of the “Past” fade and die little by little. But I think that as time passes we may find ourselves facing that past in our way at a time and a place when and where we did not expect. This is exactly the case of Japan now, 61 years after the defeat in the war. Shadows of the past are still waving there between Japan and its Asian neighbors like South Korea and China and even North Korea. Shadows of the past are still there in Okinawa, as well. Since the past is still alive we can not declare an end to “Japanese Literature After the War”.